912.3
カ

賀状

清[illegible]上[illegible]清[illegible]

[illegible]交[illegible]　[illegible]横川[illegible]の

[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

一[illegible]

[illegible]

[illegible]のつゝ雲井遥々と見し月の都の山
[illegible]が[illegible]の[illegible]の[illegible]
よ清き[illegible]の[illegible]がやかなる[illegible]
[illegible]そ[illegible]賀茂川と見れば[illegible]
つきせぬ[illegible]白羽の[illegible]瀬見の小川の[illegible]
[illegible]人ありて濁ると見ゆる[illegible]
らしや清き心にすむ水の賀茂の河原に出る

御座あり 忝くも此国の人の世に 神を
神の道なれば [illegible]水の[illegible]の[illegible]
て[illegible]見れば賀茂川の[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]都の[illegible]
よろづの[illegible]御手洗の[illegible]

おまた称のむしろかを霧打れ
絶ゆる雲張所よ光ぐる方の
りぬる旅の那じ打都に拐八みせ赫
のみらさる風のふ喜御手流のおく

も浮しき衰へやく紀の森指よりし
初春の梅も都に於いて
今下るより村夜の雲まみふ夕潮日夜
去れる河浪も寄せる彩かし波
聞こえぬ人らのし　同れ是わの水を
禄ろく此まさ事れは　此方の東やく
此の浦の本そ候そ是は浜うとも当年ハらの

わきて其名も御事なりぞとも
よりの御事にてもあるそ　是は播州室
明神の神職の者也扨も當社の御神事は
又是より河尾と申す事あり　漕とも下
數に白拍子の舟をもて御神事を捧げ候
伝え今年は事かく候　扨は室の
明神の神職はかく出立て又是より何々申候

當社の御神御神と申は唯是天の御
事也おそらくは無形の事なれば濁世にさかひ
は至て和光同塵結縁よりはしく衆生
をさ甚中には光は天孔濁世の道に
し越く神の御事をおもふにくさや
されば昔しは一代とわきのへし昔は雨は
秦の氏女と申し人綾羽呉羽川竹は出

てあまの羽衣の袖よりも雨にぬれけるより
白雲の天下をそれまでは楠の葉を
知て海の蒼の波はまさにおさめ拾懐
勝し男女とものは其子三歳と申し時に
海のし女夫はしは夫まはの袖をあ
をな天則ならいつとなりそまるわの
袖と袖の別霞の神光あり
至風母みなかみ

所は鴨三社の神所とかや　八幡をかせて
懐の海との神様と遥なりて　方ぞ住ませ
我が心にも心ざし深き願ひ叶はん人の願ふ
濁世に流れ出でしその八百萬代の末までも
若代あまた度かわる　濁り世にあふまでも
さらく末長き浮世の　その末の世にわ
こゝぞ鏡ます神の神秘なる　濁りもなし

実に頼もしき霊験とも濁りなき何事も頼むべし
中に流も濁りも　同じ流れの清きなれ
加茂の河瀬ぞ名の　下ゝ川
賀茂の河　御手洗も　加茂の名の石
河原せきの小川乃清き　濁りも流れさと
飛鳥して流も濁を同じこのみなれて
何と来る人のあはれ　くる年の恵ながくも

日月光陰おしむべし猶たのみの多く流れ
かゝる浮世のならひかや[illegible]
くるゝ夜のほどもなく[illegible]
須磨も[illegible]清盛の河原乃ふ上
見わたせば[illegible]
孫[illegible]のさくら嵯峨[illegible]の高嶺
[illegible]やま[illegible]川 水もわくかくしも大井河そ

まゝ[illegible] 嵐の峯に[illegible]
[illegible]の花おもかげ[illegible] 清滝河[illegible]
くは[illegible]高雄のみ寺[illegible] 朝日[illegible]
[illegible] 小倉山[illegible]
てから[illegible] 亀[illegible]上と
[illegible]の[illegible]
月[illegible]の梅津[illegible]桂[illegible]

濁りなき水に月の影さへ我心も澄めば
よし梅くかげは影をとの池のみ神の宮
なりけん　慈悲ん　彼はやかるるなり
海をさる人の罪きぬる人を弥陀
守りれば神徳と思しめん悩おほく
恥かしや我深き神のとおもひて浅海
座ながら海にやなりける人は名をなり也

さて御名は止事なれば神それに迎て
君まなれ神くれ共かりしきもや神を遊
れ姫りれなり大ヨリ有難の折から我身
名残をしとも法界無縁の流せ
不幸おもひ見るかな心に神感おもふ
やかりね清き浅守也　まの御へしゆう
亀やなかる恵をも今は附　時にも御なり

こゝに感應あらハに新なる微妙の好
相荘厳の砌りかりハ舞楽の　賀茂の
山もとミれば流れ清く緑の緑
の色もかはらでともなき雲ゐまで
も影くもりなき。山河草木動揺して海のおもり
ありけ雷の神体を現じ給へり
さて玉姫とも御祖の神の別雷の神也

或ハ諸天善神と現じ庭上の苔に
みな國土を守護の方便　和光同塵結
縁のはじめ八相成道の利物の終り　随縁
まひちる雲井ぐ　別雷の雲霧を払ひ
光瑞雲の宮居の　厚く雲は
雷の雨とそもに海上
はるくとうかてぞ雲にあとものこらず。

あの松乃鼓声の時よふれハ女穀城乱も国
とも後し治海の時ふ心松徳と威光と
我心かのほ海松影をやれ志の化の森よ
我ちとひさめいて世移へし松立てふや雲
寿をと別雷乃松も天語よられたり松
も五語にようの影く康にわつ世の
散りけり

老松

太鼓序

実あふ海わり雲男の国まに浮まつよもの
雲関の戸にてかよふむ　柳先ふ都の春
梅津なかにもしくハ我事あり　されとも松
如野と底し常に古ふとそしひ所よあ
御殺乃霊夢に我と信せハ凡業安示
寺に来まさぬわりに北野の忠なる宿の兵

今九州乃積に赴きて候
上 上郷よかいふ春風の
のどかなき吹井の浦つたひ明石の浦とか
かくよ見えて錦定めなき積乃宮か遥々
たち波々を室の泊とも遠々ねくの鶴書あさに
雁声もねひの浪乃旅にも急ぎ渡る
へ一の旅の急きつき越 梅乃花ゞ見る春
まさきそめ寄ふ名に聞き 松のひとしき附

めぐりて 十海を渡り縁りなき 風と遠く
潜ぬ色なく花の名もなき松のなに 春を
迷ひぬ急ぎ行くかなふ巴字乃華様まして旅の
真よかなびく庭も春めきわたり蔵乃安
ともふ安楽寺の光のどけき春の日に 松梅
参籠まで津ミふ着きけり 安楽の道すて
も実る恵みありやけし山乃みなを霞の見る

えだを折ある花盛を手折もとがむ
梅の花ざきいさやかこの梅花の花ざかりと
こゝろも　ワキ　いかに是なる老人に尋申へき事の候
シテ　此方の事にて候か何事にて候ぞ
ワキ　此所（安楽寺）におゐて飛梅とは何れの木を
申候ぞ　ツレ　事もおろかや神木にて
紅梅殿とこそ申候へ　ワキ　実に紅梅
殿とも申へきやらんげにかくと
詠歌よりぞ今此国に飛梅と成
給へるおがみても猶あかぬこそ候へ
さてあれなる末社をハ何とあがめ申
て候ぞ　ツレ　是も同じく神木なり
ゆかりとげに思ひ給ひ是ハ老松の
重くも忝く給ひかり
紅梅殿ハ御殿也

よそも若木の花咲きまでも色香や深からん
みどりの色なく　さる程に老の身の都の
深ひぬる人の跡さへ末の世まで老
松と同じく世ぬ老木も心をなすや
三段ノ上ニ上ル
花林塘翠と輝けれはかゝる世の春
山あり　晩月松柏の風に映じ南に寂
寂たる楼門あり科行草花を寂かる
そもそも
たゞ花園の林塘あり　翠帳紅閨なれやよ
そのかみのむかしを忘れぬ石の寺の旧跡あ
る晨鐘夕梵のひゞきたえぬ寂
風の吹く花葉末なりとやせとなり浮世の
とかりと八紅へし紅へし称末乃風に松梅に
天神の御自詠にも紅梅殿も老松も
みな末社と現じ給ふまりけれは也と末の

我朝より書を濫觴と伝へて唐の
帝の御時ハ国に文学さかんなれハ花の色
を増し匂ひハ常よりまさりたり文学す
たれハ匂ひもなく其色も深からされハこ
そ文を好む木なりけりとて梅をハ好文
木とハ付られたりさて松を大夫と云事
秦の始皇の御狩の時天俄にかきくもり

大雨しきりにふりしかハ御門雨をしのかんと小
松乃陰により給ふ此松俄に大木となり枝を
垂葉を並へ木の間透間をふさきて其
雨をもらさゝりしかハ帝大夫といふ爵を贈り
給ひしより松を大夫と申也 ヤ 加様に名高き
松梅の花も千代まてと持てる家ハさしく見
久しくより御垣の守りしへき行末も

同じ名のお浜ら川竜も紅葉か花も松をもろ
ともに万木のたもとや千代万代の末遠き
かや「ありさまやいつならんくし松けり
猿猴のまく風もうそふく声も時の松の流と
も治まりて見ん社の流とも待ちて見む
「いつれ紅梅殿今教の帰人をはからず慰めれ
御垣ほしさ「勝めつくれ春もうら「梅も花盛れ

「松それも「花こそ老木の宿みかの「霊ぞも名わ
よ所外より「新とこしへ森をまるし「かつそ
とうふう寺のおもみちの錦や御堂
枝乃「此も枝の精も芳木の花若ぞそ
「梅も老木の緑松の「梅も老木の緑松も
永世に八千代の端の「緑をあつめて
若松もよ治く「君の恵みを仰ぎて松竹鶴亀

乃よろ山をさかりけ衣の袖をかさねれと
わか錦の袖をも引く松風も梅も久
いまそ見月出しきれ

弓八幡

大臣次第
弓 御代も栄ゆく男山 御代も栄ゆく男山 名も石清水の末久しき
抑是は後宇多の院に仕へ奉る臣下也
詞 さても当社二月初卯
八幡乃御神事也 即乃道なれハ清浄の
末請往まての宮有と参りつゝ八幡ハ下
向位乃声 四海浪静なる御時なれや

八洲乃雲もおさまりて実九重の道ぞひろき
治まれる代の民も豊かに曇らぬ日影もかぎりなく 八
幡山の上も若かへり八幡山よも若かへりの恵 詞
猶行末や八幡山の宮居ぞ静の神路
中治まる御代の越 神通の日も二月の乃ふ
とてやのけさ春乃朝朗 花乃都の空
おさまるや 雲もおさまり風を払ふ 君が代

君千世やちよの小松の葉しげりて若葉も
其松乃枝も常盤の山の色も古木も
此春乃日影にて通く若安全の民ぞすく閑
乃名治もさて治まる君を守の
神徳にて撫乃まつ世の月かけの
石清水せぬ流の末なれとも生流を叙
川太世の御代に民の種を例あふ

下 神と君との道すぐに歩みをはこぶやはた山の

上 松高き枝も連なる鳩の峯くもらぬ御代は

久方の月の桂の男山さや

けき影は所から君万歳と祈るなる

歩みをはこぶ宮居かな歩みをはこぶ宮居かな

「今日は当社の御神事にて参詣の人々多き

中に老翁錦の袋に入て持たるは

此袋に弓と見えて候ふハいかなる

参詣の人ぞ 「是は当社に年久しく

仕へ申し君安全と祈り申す者也又是なる袋

に入たる弓は桑の弓也御代のためには直

奉らん為に今日当社の御神事を待

[illegible]手に携へて持たり 「其

[illegible]

抑是より思ひよりきつゝ宮文武両社の御神託に
まだしく謂ひと申せし 「今日両社は未済は
書らせ拝きと申事学らそ判神亀られ
周文八千余歳 神の御代なるや素式号
葉の天下く代とおさめしも亜形の御代
の例あり継く簒し給へとよ 宝く是は
太平の御代の志めしおはしまりけん此らと

先出し神前かく叔身中なりや 「やや
問ひと先出しくは何の御周のおん入きそ 「若
唐周の代と治めし国の始めな 「引き葉
治まる干戈とおさめし例とりけく 「引きて葉
よつ道 「劔と箱におさまりてそ 太平の御
代乃志きしおはします 其周の代と乃幸鋭
各中出披露の国をとみかひは 察比ちょら

風土の八幡山ぐく抑の乃海ら奏ゆく蘇
宮船に八坂植の暖く宗祐り寺の人ま
本乃恵も多も玉たまの御神統をめく
うた神統をめでさうるる　ねくさきせんと
此年下おさされはそれ　籠よや上臣へ　籠へ
あけりまら閑ゆくみ上　标る多彩とんぐ鉢も浴
めし嫡とは月しくくらを見れ世代ちく海りても引

南殿の御神力也　統治よ神功皇后三韓
を責させ給ひしより　同く應神天皇は
聖運御生位ま久く恵富民をあはれみます
去りし今に至る世ぬ例とさや上雲上乃月
郷よりて萬民に至るまで楽しみの夜をつさ
もせるおうりとたやせむ君を守り御代
とも深き恵みにより鎮護天皇乃御守りくよ

紀伊の國名草の郡華嚴寺の藤よ八幡
宮と號し八重雲を出づるゆく浪満乃
南の山さくらぐりぬ法代を守るとて石清水
いさゝよふさし是より照し鏡へりざれし神功皇
后も異國退治の為九州四王寺の峯
にあそび七ヶ日の御神楽例も今に久
しき天乃岩戸乃神わざる祥をてう

さらや榊葉のおもしろさはそれそよの
くらゐし神是を守る川よりや神代のこ
とくれ今も絶えずる祭と通しめひも
さまのぞ萬代まで栄へ金の鈴をも
ならひつゝくまで振神わざる七日七夜の
御神楽海と天も納受し地神も感應
の海山浜浦も法代まで五穀豊饒を祝ふり

給ふ形像八幡三所の神徳ぞ目出度きを
執宝位揺はも動くべし二月休
まもりの御神恵ぞ尊き有明さす
世の御政をも松風乃家乃月の花神事を
養し尾をいのらん新御乱はとりは
きよぐしき代よりつゝ之我らが祝はゞ
伴くなゝ今は後は御まゐる生涯を

松月高良の神ゝ我君が為に何やら
むすびふりに来りし八幡大菩薩の御
神徳を守らせ給ふ所も申し御見にそれ
聞く都は御神勅をもてとくく
養しわく御山もち音楽の哭
為く其香薫わが実の花わ成給
ゆく越わくての絶やえよりもなへの世よ

まわる國紀の人よりもわらんべとおぼしめの末
もあきらけき真如実相の月なれば八百万
代のちぎりまでもつきぬ身として擁守護
あるべの神となるや我事也 二月の初卯
乃神事に西の屋 宮人よ八日新よ
をう海く 袖の内東縁西まで久しく民も栄
乃さへくうるや 実も末世も久しかる

らく神の藝ひとしや海よがくわくなら
法祖好きらむそふ所かりなら 御代を守
まれ御藝ひがよの宮ゑともへま猿
乃神徳天下一統となる事也 まことに神
代今の世乃まつりごとの広れば かるれさ
山とれ色をなせし 神乃昔に 今ぞの
月れ種乃男山さやまれ新たなる所から

高歌鳥歌遊舞く松の風まれ大宮亦
神と祝ぜし君の時代も神恵亦猶太
菩薩八幡乃神徳ぞ栄へさかゆる神
徳ぞゆたかなり京洛

氷室

ワキ 次第 大臣

八嶋の外もおさまれる大君の恵みぞ久しき恵みぞ久しき
抑是は亀山院に仕へ奉
る臣下也さても丹後国九世戸
に参りて下向道なれば是より若
狭路に掛り丹波の氷室山とかや
一見かれよりあへのかたへ参らばやと存ずる

[illegible]上

花の都の空長閑八千代経ぬべく緑
なる空ぞやはや青丹波の山つくは
をちの木陰分色く雲路乃末の程も
君が都に近き丹波路や氷室山に着
きにけり／＼

シテ尉 ツレ男 一セイシテツレ

氷室守る末ありて
山陰や花の雪をもおかしけん 深谷
は[illegible]松陰や
冬枯れきぬ残る[illegible]

[illegible]

夫一花も春をのべ天下ハ是れ青陽
いつも松の常盤の色ぞ緑なる／＼
氷室山の若風も音澄みて氷よの
いろ水音の雨も静かに寒き
年をふるに御代の[illegible]直る
ありし國も豊に栄行やこの世の山も
道ある君の、よも氷室乃山先[illegible]

縁ぐ表乃まゝきハ有かなら流衣法
と去年乃雨ゝ深き乃雪を積とそれ
霜乃蓋為年ゝハ氷室乃うちにおさまる
ありく　「げにハ見なる老人に御へさ
事の体「ことまて乃事かくのうちすれ
ゆゑ「梅も毎年摘つ旅の纔の紙にも拂ゐ
なれ大要とも見ん旅すの今猶あり梅と申

成構にしても春夏過ゆき氷乃清き水
調奏流掛遺之「背の特乃曠跡よ一村の
震乃下に於若よ此分乃御月まで不思風流舞
禁はうりまかせらにおき世のことの雪乃ぢとく
あ毎ゆ縁の山遷こと派る一人の老翁
雪氷とを屋内よ通へさりぢ波旅中候ふ
生絶家ふた此志雪紀申とて葉の申也

兼てかくのごとくして氷を供御に備へし
より氷の抛出し供御にも備りては謝
をゆく八雨の日や梅く氷室乃ことなく候
よりも聞くにおよまさ給りてなほよらぶ
然らに仁徳天皇乃御宇に大和国つけ
乃氷室より備へ初めし氷のおこり
又甚降も山陰乃国も露も消つくし

徳乃北風もまつさに　北山陰も氷室
ありしと　丹後国に西せ流く深
岩もふやまに岩風氷も　便宜と
へく冬遠も　東北世人乃氷に供流嫋冊
彼国桑田の郡に氷室を定めおかり
宮人兼のまへくに山も有も本深き法
乃日新もまぬ深き意も思に寿かも

雪氷の消ぬも不思理り也　いや猶に
よりさく氷の消ぬ事ハ是ハ君の威光
もちろん余所に漏さり　民よの常の氷ハ
一夜の内にも年を越る是ハ　春立風に
たきも目に押ぬ　され共氷室にも　貴き
か神ハひさしく山もとの水の氷室守と
く貢今日の風や暑く涼しとよるとか

是ハ徳の内に春に寒る氷も消ぬ
かひハありける御代とてやなかき夏関くに
水無月になれども消ぬ雪の氷
供御の力にかゝへてやがて加ゆる雪を
らんく　捧ぐ氷室の調進ハよをもり
今ハよろ世もかくて　天地人の
三光ふかくまことにうけ　山海万物の

是則王地の君徳也　宮もふかく
帝都もかやうにさかんなり　仏日光あまねく
みのり法備常に増せり　潤徳折々
たゝ合ふべく　雨露霜雪乃時をたがへず
夏の日になかる遊消ぬ寒き風や
よろづのめん宝数なりや万物時に逢
なからば義の恩この及くへ都乃御

此山よりぞ端山の梢ましげに丹波
西の下水に氷室山の雪の氷室山ひ
木もたゞ君が御影よりそれぞれさ寒
我なからぬ万代葉乃浮世乃数に有影
御貢ふなとて捧天照乃氷乃物や
絶ぬやまぬ形の捧物厳蔵の川く恩家王
禄をあふるも御貢と運ぶ故とかや

既に年さへ暮れて春立つ今
日のひかりもうつりゆくかげお
きさらぎも山陰の去年のまゝにふく雪
いく雪もなをしかと櫃袋めて浅下水
よ櫃へてくだ氷をかさね雪をつゝみ清れ
はる色くや夏山よりもわけるハ八十
氷室の構へ立てくだ其事もあけの

氷をさむるあり氷室も夏衣うすれとも
袖さむく雪なりしとさむけりと霊験ありなれ
氷の物くみれさしきまゝに直なれる
御都かいはまゝふん　鄙にも住まん
しばし遊山路乃あらいくしにさん氷の
御貢備ふる御代をなれ御世まで　それをいひ
いまの家とかや成事ハなからん

入らん志らね波山かぜ　山神木神の氷
室を守護し給ふ世の春をまつ也
とぶひも見へ神ハ山かれ／＼寒風松声に
又吹そ時からね雪の消落山水草木
をなびく氷も去れバ瑠璃壇よ大かた
と思へバ氷室より光り落ちね踊るを
く室の内よりハまりて氷室のこほり

のまり　雷声上　天女舞のかざしれ／＼たる鳥の舞の袖
の袖をそよがせゆくまま　豊かなる光代の光
も天照まで氷室の内も[illegible]るなり　[illegible]へ
よろしくさも潔く氷室の庭　ちからも志そ
受けつかのけよて　山河も震動して
地も雷に寒風頭よ肝を消すめく紅蓮
大紅蓮乃氷をとりて氷室の神[illegible]さえ

暁てぞ知る先つ冴ゆる寒風氷遍く渡りける
て凍く氷の面　萬鏡を
白玉の如く　清風梢を吹払ふく
けも本来さきの戸は　雲は吉かき
霰を摘まりて　岩も氷も流れ石の
の井の水の面付を　動かく
し今日氷室の神風も寒き峰

亀山や　わが君の御代も万歳
く流をおそれ　氷も河もれし
氷の日はらせば　水鉢を添ふ氷室の
地の底へ　運び入れ大宮へ　宮中の
雪の雷をあらしの　宮殿のだにり花へ
そ嶽氷をとゞくらば　[illegible]と
氷室の神は　氷室を守護し　白影を[illegible]

て色と水とそれぞれ清風と嫋しく花の色
まで雪とふる雲を清らそゆかしきや都
もえそふりく急けやいそげ祝れ花と
御身の所も其宿の郷。将の供御も同
乃りとれ君にかゞみりさ拙らそめてふきれ

夜討曽我

祐成 鬼王
時宗 弾三
冠者

其夜も方角さ富士の根れしく内将に
いざやむかよ 祐成 是ハ曽我十郎祐成見
守ゆくの。梅も我兄弟東の箱根行を
をも川かみ嫋しの手引の筏さそて進ひ。
我おもひ足もあやとほ見て富士ありて候
跡へと急ぐ。十一段 今日出ていつ帰るへきらん

と云へは筆にもいひかたし　金蔵とおもひ
む我宿乃垣根乃雪は卯の花の
咲散風乃匂ひきと我是折節なれは
冨士のすそ野に思ひはまよひく
げに我は冨士のすそ野に着ては　げには時宗
強者亦は幕紋げにもけしへ見
げに時宗今は神ぬ御事なれ也

我君の御いとまこひ猿の月もさそは
げにかはらぬあはれ人の中にも我兄弟を
幕の内こく掻さひかなをは　我
げにそれ姫ぬ御事にもなきのかな
御事はげに　我御すと何事か作
我が情なれや　げに我本の所附を忘れす
なくげに　実くされ何も忘れ事はなくげに

狙ひの抜いてはまんなかへ御身こそござらぬかく
もたるへきやうに思ひ定めてはへ 御陣の支
らくは抜いて川をあるかしへは亀とこそ今様よう
あれ彼りの抜うつ事は関いては 挑まれ
うれたるへくは渡しくいそれゆゑは思ひ定めては 屋
とひ出しう來れは。我ゆたて抜出し。関。
母ににとも申さ守は頼れ。かなうけそふ文字

兄弟のこれはかりは五郎兄弟時致
とも兄弟の抱いては世を去らいさくと思ひて
はして 実に兄弟は死すそのおもかなしみ兄弟へ論せと
しかれ定くらかへ申は一ぱ今二人うち御論も
おもと海は 死すその御ハ二人命にて伊豆へ
居へ して 思ひてはいはん國に三郎兵衛尉へ来り
出へ して 思ひて伊豆國三郎兄弟兄弟へ来りては いはれ

ところ是ハ今こそ御車とゞめ給ひて御前に参らせ
よとありてはかれがへの給ひし事とハいふに宮の御
やまざくら名残を惜しみ給ひて御所へ（シテ）是迄なり御暇申て
それ故とかくなしてまゐらすると思ひしに御祝言を聞召しめ
まゐらせて御代の御めでたき（児玉）先是迄と申しける（仮三）今日御
めぐみの（シテ）御室の御遊に参りて候と申ければ御とも
今日の御祝ひ（仮三）是ハいかに児玉殿の御盃ハ御申給

然るに御孫は猶も末ながく千代萬代の
まつの（児玉）緑の色も深くして世々をかさねて栄ゆる御代の
めでたさハ葉も色そへて松の葉の千代をかさねて今日の日を
つらねてかはらぬ心をむすびて思ひのまゝに祝ひて是を
さかづきの御酒に（仮三）是ハめでたくうたひ舞ふ
おさまる世の（シテ）声も長閑に是ハ猶たのしみの代々の
（社）国も豊かにめでたくいのちながく万代までも

然る所に在て立出今彦山とらかつて於
浮浅打我かさやさいもおしるべさそ
立たれまし淚を母は泣焉れなからたちどへ
さ迷ふらやまふりの、れさむさず淺香山
乳もてあまり花咲されて八生く世く。
我さ母世までのかんさしとかさふれの
さ露へばく鬼王弾三郎給しは飛鳥

世にやまむさて声高下より里に端くもて乃
流せよれのへれぬらまへのかつらみを膳て
例の是彼のるあの楔喩の母乃さは名
久しき永き世迄の例とらや今東
の弓とる皇れば母親とハ花とぞ付るら
我ハ我らが嬢にさへたらふへそれ
わらね代男君乃嫁乃れ義をは我を

尼とてぬるやわか荘厳に住みて父に逢ふと
書きおきし是ぞ形見の今となりぬれば書
文の文字消えてかく形見に読みぞへ
涙の露身からみ跡に消えぬる物あかしに
水茎の跡を心よりひくへき老が身の
定と思へども露の命も斬まれし老に
も終の世の中は死ぬ恋の事の思

しるしとぞ其より時宗も肌の守りとなりにし
是を時宗離れぬ形見と読みて今みちて今は
跡の思ひは母の孫と申せし無常の雲きえし
思ひられは時宗も母とは隔りぬれ
思ふも世の中に其よりも仏の観世音
母の為に来世をたのみけ給へやさ
能浪日も円波の鐘をうやまへ結縁

無常とは浅からぬよしげに思ひを彼
涙とゝもにふらる其比の夢ぞ懐
間もなく顕き人の心ぞかはらぬ雲
の外や富士の裾野の曽我にて御出
兄弟もろとも悦び跡を見送りて泣て
早鼓
涙の影さよく月よ也けて打帰の
立越
音なく関と門も隠されぬち
早笛

然る軍兵陣所が神出兄弟を討んとて
多くの勢を隠しおきけるが害せんとて
あらそひかなはぬ十郎殿くだんのきや
何とてはかなき事ならおもさそ新田四郎
と戦ひ続きけるが扱ひとよや討ち給ひて
いかや口惜しかりけり一命を絶りしけれども
思ひ出をの…

て縁をきらんと念おせば 味方は是非なく八幡
をのく／＼打物の鍔本くつろげ時宗
と見給ひかゝりけり あわ／＼しやあの
者どもがなにほどの事あらん物をと
太刀取直しふり廻し さんざんになぎたて
あたりにけ寄り かゝりきる所をぐはら／＼門方の
なかや五郎 樊噲が怒をなし 長刀を振

衛を始めつゝ五郎がありてはなれて切てかゝる
時宗も兄の十郎もはやいふまゝ太刀抜きもち
はと前後の敵を何と切払ひ
御身や五郎は一度に技見てこのまゝ
かゝるまゝの所を時宗のがれ十郎丸は
前に入って時宗を肌身はなさず
神をもうけ 兼て挿してげに抜

戀上手は花をさそふつゆに唐にたに
めそ的戀鳥の働今も時宗も疑つゝ
うれしくかも花て識の女そと申郎
して無例を追りをこ押あくへからでと
おかはは　胡の連ハ何者そ　此所の立
説死甚摘ことと鄉纏れんくさい
申くとみゑれく時宗うふすの

右下條謡若往々極
行雖多言違章誤雜
計勝今亦不闕不善補
不足當流細密之加
拍子令改正者也
元禄二歳己巳初冬吉辰
日本橋南通三町目
刊倉屋喜兵衛

98.3.